



ニューズレター

No.19 June 2010

NEWSLETTER

日本水環境学会九州支部

発行：社団法人 日本水環境学会 九州支部

URL：http://www.jswe.or.jp/katu/shibu/kyushu/kyushukatu.html（水環境学会九州支部情報）

事務局；〒814-0180 福岡市城南区七隈 8-19-1

福岡大学工学部社会デザイン工学科（担当：山崎）

TEL: 092(871)6631 内線 6462 FAX: 092(865)9460

E-mail: yama@fukuoka-u.ac.jp

ニューズレター担当者連絡先；
福岡県保健環境研究所（担当：熊谷）
〒818-0135 福岡県太宰府市大字向佐野 39
TEL: 092(921)9948 FAX: 092(928)1203

目 次

1 巻頭言

福岡大学

山崎 惟義

2 平成 21 年度水環境学会九州支部大会研究報告

A 会場

セッション 1

熊本大学大学院

川越 保徳

セッション 2

福岡大学

伊豫岡 宏樹

セッション 3

鹿児島工業高等専門学校

西留 清

セッション 4

福岡大学

渡辺 亮一

B 会場

セッション 1

鹿児島大学

高梨 啓和

セッション 2

福岡県保健環境研究所

熊谷 博史

セッション 3

福岡市保健環境研究所

中牟田 啓子

3 平成 21 年度水環境学会九州支部大会総会報告

福岡大学

渡辺 亮一

4 平成 21 年度支部表彰者よろこびのことば

水環境貢献賞

フィールドウォッチ研究所

青木 宣人

5 水環境若手研究・実務者育成基金による学術研究補助事業による助成報告

福岡市保健環境研究所

東郷 孝俊

平成 21 年度支部収支報告ならびに平成 22 年度支部収支（案）

平成 22 年度水環境学会九州支部役員

1. 巻頭言

水環境学会九州支部長
福岡大学工学部 山崎惟義

昨年度は第44回日本水環境学会年會を当支部の実施担当として開催致しましたことが最も大きな行事となりました。実施にあたりましては、支部の皆さま、特に運営委員の方々には一方ならぬご尽力を頂きました。まずは心よりお礼申し上げます。本年會の実施につきましては、学会誌6月号に詳細な正式の報告が掲載されますので、ここでは、私の感想に少し触れたいと思います。

本年會に先立ち、第43回年會が山口大学にて昨年3月に実施されましたが、その折には本年會の実施の参考のため、準備委員会の方々をはじめ大挙して参加して頂き、懇親会では回りの皆さまが驚かれたほどでした。すでに、実行委員会が立ち上がっているという雰囲気、本年會の企画(見学会や講演会など)のご意見も次々に頂きました。

しかし、実際に実行委員会が立ち上がり、さらに実質的な運営委員会が走り出すとやはり実施しなければならないことも多く、さらに実行委員長長の決定や決断が不適切なタイミングになるなど、運営委員の皆さま方には大層ご迷惑をおかけしました。特に、プログラム作成の指揮と実施を頂いた門上希和夫先生、クリタ賞・ライオン賞の取り仕切りを頂いた高梨啓和先生、学会誌の年會関連記事を担当頂いた久場隆広先生、見学会を実施して頂いた徳永隆司さん、全体の取り纏めを頂いた渡辺亮一先生、熊谷博史さんはじめ多くの方にお世話になり

ました。

年會当日には福岡県ならびに福岡市より多数の方にご援助頂きました。また、受付担当として高見徹先生、会場担当として川越保徳先生、他にも大層お世話になりました。

最後になりましたが、会計並びに受付の大役をお願い致しました中牟田啓子さんにはお礼の申しようもありません。

お一人お一人お名前を挙げてお礼申し上げたいと存じますが、紙面の都合もあり、ここで、ご協力頂いた全員の方にお礼を申し上げます。

さて、解決すべき支部の課題も多く残されています。第一に日本水環境学会の法人格の問題が生じており、支部の残金を減少させるよう本部からの指示を受けています。皆様方におかれましては、有意義な使途についてご議論頂たく存じます。第二に会員の減少が挙げられます。この問題は日本の全ての組織が抱えている問題でもあります。本支部においても避けられないものと思われま。ただ、会員数と組織の活力とは比例するわけでもありません。コンパクトでも活力ある組織づくりが肝要かと思ひます。皆様方の智慧を寄せて頂ければと存じます。第三に支部役員組織の充実が挙げられ、支部役員会にても議論されています。是非皆様方に多大なご協力をお願い致します。

なお、今年度のシリーズ講習会として、「水環境の原点をもとめて 白神山地の水環境」を企画できればと思っています。皆様方のご参加をお願い致します。

終始お願いばかりで誠に申し訳ありませんが、次期支部長の門上希和夫先生への期待をこめて、巻頭言とさせていただきます。

お知らせ

現在、水環境学会九州支部のホームページ立ち上げ作業が進んでおり、今年度中に開設予定です。
これに伴いまして、例年ニューズレターを郵送しておりましたが、来年度よりWebによる閲覧に切り替える予定です。
支部会員の皆様で、Webの閲覧環境が無い等の理由により、従来通り郵送を希望される方がおられましたら、事務局まで御連絡下さい。

連絡先 : yama@fukuoka-u.ac.jp



2. 平成 21 年度水環境学会九州支部大会 研究報告

日時：平成 22 年 3 月 18 日 10:00~16:10

場所：北九州大学ひびきのキャンパス



< A 会場 >

○ セッション 1

(担当：熊本大学大学院・川越保徳)

本セッションでは口頭発表 3 件、ポスター発表 1 件の計 4 件の発表がなされた。

「生態影響試験におけるフミン様物質と重金属の錯形成反応の影響」では、親油性キレート抽出剤-逆抽出法を、水に含まれるフミン様物質の錯形成能力の評価に適用できる可能性を示した。また、オオミジンコの遊泳試験結果と金属錯化容量の関係から、フミン質等が共存する水環境下における重金属の毒性影響を、金属錯化容量で評価できることを示した。これまで、環境水中のフミン様物質の動態や金属との相互作用などに関する知見は少なく、今後の研究が期待される。

「瓦廃材と希少植物を用いた池水の脱リン及び脱窒素」では、瓦廃材と福岡県の天然記念物に指定されているツクシオオガヤツリを用いた池水からの窒素、リンの同時除去についてラボレベルで実験、検討し、良好な除去能力を有することが確認された。今後、より詳細な実験の実施が望まれる。

「水性生物中の水銀とセレンのスペシエーション」では、生体内での有機水銀の挙動・動態とセレンとの関係解明に関する研究の一環として、魚類や海産ほ乳類中の水銀の存在形態(スペシエーション)や、堆肥化過程における水銀とセレンの存在形態の変化を調べた。その結果、魚類、海産ほ乳類では無機水銀よりもメチル水銀の形態で存在する割合が高いこと、また、水銀濃度は魚類よりも海産ほ乳類中で高いことが分かった。さらに、堆肥化過程においては、メチル水銀は無機水銀に変換され、セレンについても遊離セレンの割合が増加することが明らかになるなどの興味深い知見が得られ

た。

ポスターにて報告された「Environmental Load Reduction by Local Government's Program for Certification of Recycled-Material Products – In Case of Fukuoka Prefecture's Program」では、環境負荷低減策としてのリサイクル材料の認定プログラムに関し、福岡県の実施プログラムを例に、その廃棄物削減効果や二酸化炭素排出量削減効果を定量評価した。その結果、認定リサイクル材料は、廃棄物量削減について一定の効果を見込めるものの、二酸化炭素排出量の削減効果は小さい可能性が示された。評価の正確度、精度の向上が今後の課題とされる。



○ セッション 2

(担当：福岡大学・伊豫岡宏樹)

本セッションでは、3 報の研究発表と 1 報のポスター発表の紹介があった。ここでは、各発表のエッセンスを報告する。

A-04 は、石炭灰からの微量有害元素溶出についての報告で、種々の石炭灰を用いて溶出試験を行った結果である。B、Cr、Se 等の元素が、土壤環境基準を超えて溶出する可能性を指摘し、酸洗浄などによる溶出抑制効果について検討している。

A-05 は、農薬として使用されるメチルパラチオンの塩素処理による生成物について GC-MS を用いて検討したものである。本物質を含む河川水が飲料水に使用されることを想定し、予測した生成物と分析結果を比較したものである。このような化学物質が環境中でどのように振る舞うのかについて興味深い研究である。

A-06 は部分亜硝酸化 Anamox 処理の適用の際の NH₄-N の処理についての研究である。畜産排水消化脱離液を用いて、前途の処理を行い凝集剤の使用や、適切な pH・DO・HRT のコントロール方法について言及している。

最後に P-02 として、ベトナムの Da Nang 市における廃棄物の管理についてのポスター発表の紹介があった。水環境以外も含めた廃棄物

の処理状況についてまとめてあり、今後の同市の持続的な発展に寄与する研究である。

各報告ともに、活発な議論が行われ有意義なセッションであった。



○ セッション3

(担当：鹿児島工業高等専門学校・西留清)

本セッションでは4編の発表がなされた。

鹿児島大学高梨先生を中心とした「超低温捕集法と HPLC を用いる海産物中のヒ素スペシエーション」の研究発表では、海産物中のヒ素化合物の分析において、HPLC 法と CT 法を併用することで、ヒ素スペシエーションの精度と効率性の向上が試みられている。両方を比較した結果、海藻類中のアルセノ糖類の合計量 (HPLC 法) とジメチル態ヒ素の量 (CT 法) 等が一致しており、引き続き本研究の発展と成果報告が期待される。

宮崎大学鈴木先生を中心とした「沿岸域レクリエーションエリアにおける細菌学的調査」では、宮崎市のレクリエーションエリアを対象として、海辺の波打ち際の海水および砂のモニタリング調査でふん便性大腸菌群(FC)と腸旧球菌(ENT)について継続して報告されている。ふん便性大腸菌数は降雨による影響を受けて増加することを指摘している。ふん便性大腸菌数と塩分濃度との負の相関も示している。今後とも継続した研究が望まれる。

福岡大学山崎先生を中心とした「樋井川を対象としたアンケートによる流域住民の意識調査」では、今後の住民の意向を考慮した河川整備を進展していく上で、住民の河川に対する関心や、水害に対する住民の危険意識を把握することを重視している。その結果、地域住民は自然豊で水質が良好な河川になることを望んでいる一方で、水害に対する住民の危険意識はあってもその対策については低いことを指摘している。

熊本大学古川先生を中心とした「Anammox プロセスを活用した塩分濃度アンモニア含有廃水からの窒素除去」では、ガス田地下かん水

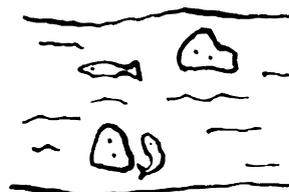
にアンモニアと海水と同じ塩分濃度が含有され、従来の硝化・脱窒法では塩分濃度による阻害のため大きな処理施設が必要であることを指摘している。そこで、Anammox プロセスを活用し高い硝化・脱窒を確認している。今後とも Anammox プロセスによる高い硝化・脱窒の研究に期待したい。



○ セッション4

(担当：福岡大学・渡辺亮一)

A 会場セッション4では、以下の4件の口頭発表が行われ、発表事項に対して活発なやり取りがあった。鹿児島高専の水元さんが A-11：回転円板法と担体を用いた有機物酸化・硝化・脱窒というタイトルで発表された。担体を用いた場合のシステムについて分かりやすく説明していただいた。次に、鹿児島大学の岸田さんより、A-12：1, 3-ジクロロプロペン塩素処理物中の変異原性物質探索と題して説明いただいた。また、同じ鹿児島大学の加藤さんより、A-13：Fenitrothion 塩素処理物からの変異原の探索というタイトルで続けて発表いただき、これらの発表では、農業に用いられている農薬の変異原性について説明され、使用可能な農薬について議論を行った。最後に、宮崎大学の小林さんから、A-14 鉄コロイド吸着と泡沫分離を組み合わせたウイルスの高効率濃縮法の開発について説明していただき、水環境中に微量で存在するウイルスの測定に関する議論を行った。このセッションでも、活発な議論が行われ、優秀講演者の選出には苦慮したが、全体的なまとまりを評価して A-14 の宮崎大学の小林さんを選出した。



<B会場>

○ セッション1

(担当：鹿児島大学・高梨啓和)

本セッションでは、3編の口頭発表がなされた。「ハイブリッドアナモックスリアクタの窒素除去性能の研究」では、グラニュール法と担体法を組み合わせる様々なタイプのハイブリッドアナモックスリアクタが作製され、その窒素除去性能が報告された。内部循環を伴い、GSSを設置したリアクタにおいて、最大窒素負荷率 $15.2 \text{ kg/m}^3/\text{d}$ 、窒素除去速度 $13.3 \text{ kg/m}^3/\text{d}$ が達成された。

「回転床型リアクタを用いた連続水素発酵に及ぼす HRT と ORP の影響」では、不織布を担体とする回転床型リアクタにおけるデンブンからの水素生成能と、発酵槽内細菌叢に及ぼす HRT および ORP の影響について報告された。水素の生産性は HRT の短縮に伴い上昇する傾向にあったが、水素収率は HRT の短縮に伴い低下することが報告された。また、ORP の制御に用いた硫化ナトリウムの濃度が $5 \sim 50 \text{ mg/L}$ の範囲においては、SFAs 濃度、糖消費率および水素収率が安定したことが報告された。このときの ORP 値は -200 mV 前後を推移していた。このことより、ORP 値を安定制御することで、安定した水素発酵を行える可能性が示唆された。

「福岡市内の諸河川における降雨に伴う水位応答の地域性」では、福岡市内を流れる諸河川の降雨に伴う水位の応答の特徴についての比較・検討結果が報告された。調査した諸河川における降雨に伴う水位応答の特徴は、同じ地形分類の地点でも異なることが報告された。今後は、土地利用や地質などとの関係が期待される。

◇ ◇ ◇

○ セッション2

(担当：福岡県保健環境研究所・熊谷博史)

本セッションでは、口頭発表3件、ポスタープレゼンテーションの1件の全4件の報告がなされた。

李らの「グラニュール Annamox 汚泥の窒素除去に関する研究」では、Annamox グラニュールを長時間培養することで、沈降性に優れた Annamox 汚泥をリアクタに安定して高濃度に維持することが可能となり、安定した窒素除去が可能になったことが示された。今後は本システムの実排水への適用が期待される。

宮津らの「高級脂肪酸塩および析出シミュレーション」では、不溶性で生物分解速度の低い金属石鹼についての析出シミュレーションを計算化学ソフトウェアおよび電解質熱力学モデルソフトウェアの組み合わせにより行うと同時に、実際に金属石鹼析出実験を実施し Ca^{2+} 濃度によりモデルの整合性を確認していた。実河川での影響把握に向けて更なる研究の応用が期待される。

渡辺らの「裂田溝における護岸改修工事が魚類生息量に与えた影響」では、護岸改修工事に伴う水路内の物理環境の単調化により、魚類生息量・希少種が減少する傾向を確認した。護岸改修前後の詳細な物理・生物データが取られており、これらの結果は今後の護岸改修や生態系修復を実施する際の重要な知見となると考えられる。

Seitkasymov らの「Water Uses and Anthropogenic Pressure in the Kyrgyz Republic」では、キルギス共和国における水利用の調査が報告された。将来の同国の適切な水管理に向けて、各機関の連携のとれた全国的なモニタリング活動の確立が必要とのことであった。

◇ ◇ ◇

○ セッション3

(担当：福岡市保健環境研究所・中牟田啓子)

本セッションでは、海域における水質に関する研究が1編、嫌気性アンモニア酸化 (Anammox) 細菌を用いた研究が2編、排水中の有害物質の除去に関する研究が1編の計4編の報告がなされた。

貞方らは、博多湾の室見川河口付近に存在する2つの窪地の DO を詳細に測定することにより、1潮汐における貧酸素水塊の短期的変化を

明らかにした。窪地の形状の違い等により周辺部への影響は異なることが示され、博多湾水質改善に生かされることが期待される。

嫌気性アンモニア酸化（Anammox）細菌を用いた研究として、川久保らは、下水処理場工程から発生する返流水に含まれる高濃度の窒素を除去するため、SNAPプロセスの適用を検討することにより除去率 80%以上の安定した窒素除去が出来ることを報告した。また、友重らは、淡水性に比べ基礎的な知見の乏しい海水性 Anammox 細菌の温度の影響やリアクタ形状による窒素除去能の変化を検討し、25℃より温度を上昇させると除去能が低下することやリアクタの形状により除去能が変化した事例等が報告された。Anammox 細菌を用いた窒素除去は新たな技術として注目を集めていることから更なる研究の推進が期待される。

山田らは石炭燃焼プラントより排出された脱硫廃水の微量有害金属の除去を目的として、模擬廃水を用いた除去法の検討結果が報告された。吸着樹脂を用いた検討では Se の除去が困難であったが、光触媒還元法を用いることにより、Se（VI）を不溶性の Se 単体へ還元除去することに成功した。今後、実プラントでの微量有害金属の効果的な除去が可能となるよう研究の推進を期待したい。



3. 平成 21 年度水環境学会九州支部大会 総会報告

福岡大学 渡辺 亮一

平成 21 年度社団法人日本水環境学会九州支部総会は、平成 22 年 3 月 18 日に北九州市立大学国際環境学部で開催された。

今年は、第 44 回日本水環境学会年會を 3 月 15 日～17 日まで福岡大学で開催した直後の開催であったため、九州支部の事務局の方々には非常に無理なお願いをしての開催であった。午前中から午後にかけて、研究発表や講演、ポスター発表が活発に行われた。年會直後の研究発表会としては非常に盛況であった。同日 16 時

40 分から開催された平成 21 年度日本水環境学会九州支部表彰式では、九州支部研究発表会学生・若手研究者優秀講演者表彰に引き続き、水環境貢献賞に選出された青木宣人氏よりサケ・ヤマメのふ化・飼育放流、植樹など遠賀川における水環境保全と自然環境教育活動についての受賞講演をしていただいた。従来は、表彰状を渡すのみであったが、今年度から受賞内容に関して講演をいただいた。講演をいただいた方が総会に出席している会員にもその内容が伝わったと考えられるので、来年度以降継続していくことが望まれる。

それに引き続き九州支部定例総会が開催された。支部長の山崎先生にご挨拶いただいた後、定足数を確認して、定例総会が行われた。この中で、九州支部の HP を充実するために、予算をいくらか使うことが案として出され、来年度については、初期費用として 12.5 万円程度かかるが、HP を充実させることでニューズレター費用等の通信運搬費が削減できるので、これまでと同程度の金額で維持できる予定であることが確認された。情報発信が十分にできるようになるので、メリットも多いということでこの件は了承された。年會の余剰金の一部（80 万円程度）が九州支部に入ってくるので、これを使いながら支部活動を活性化していく必要があることが役員会で指摘された。

また、年會開催期間中に行われた拡大幹事会では、支部に 25 万円ずつ配分されている活動資金について資金が潤沢な支部については、減額し不足している支部に回す案が上がり現状では九州支部は 20 万円に減額される可能性が高いことが報告された。今年度は、九州支部が年會担当であったため、幾分支部の活動が疎かになっていた点もあるが、来年度以降は次の年會へ向けて支部の活動を活発にしていきたいと考えている。

4. 平成21年度支部表彰の

よろこびのことば

・水環境貢献賞を受賞して

フィールドウォッチ研究所

青木 宣人

去る三月十八日「水環境貢献賞」を思いがけずも頂き有り難うございました。

御推薦いただきました原口様そして認めて頂いた諸先生方に深く感謝致します。

昭和三十五年、北海大学在学中60年安保でキャンパスが閉鎖されたのを機に演習林に身を寄せたのが自然環境に関心を持つきっかけと成った。以後ヨーロッパ・南米・アフリカ等々旅に出たが行く処は何処も秘境に近い所で自然と対話していた。熱砂のサハラにも極寒のアラスカにも植物が在り生き物が棲んでいた。人間が経済目的で開発の手を入れない限り生物は環境に順応して立派に栄えていた。

開発に伴う汚染が原因で生物が激減してゆく現況もたくさん見た。なかでも水の汚染は文明に半比例して進んでいる。ドイツでお世話に成った農園主の言った言葉が忘れられない「この豊かな土地で農業が出来るのは、あの森が在るからさ」彼は遠くの広大な森を指した。髭面の奥の目が優しくかった。

如何に人間の科学文明が発達しようと地球に必要な水と空気と土を造り出す事は不可能であろう。一九七八年九州へ帰り九州大学農学部の宮島先生の門を叩き森林環境をかじる一方で北海道やアラスカでその生態の不思議さと姿の美しさに魅了されトラウト(鮭鱒)の研究にも取り組んだ。北のベーリング海から九州の山奥の溪流に生息し美しい水にしか生きられない、それがトラウトと呼ばれる魚である。一時期この魚が日本から消えかかった。

昭和三十年代は北海道の海や川にも鮭の回帰は僅かな量に減っていた。日本の溪流ではヤマメは幻と言われていた。その後人工孵化放流により復活したものの近年海水温の関係か漁獲は少しずつ減っている。九州北部の遠賀川は鮭の遡上する南限の川で有り、その源流域はヤマメの生息分布域で有ったが私がこの源流の

地に住みついた十八年前にはほとんど絶滅していた。九三年から僅かに残っていたヤマメから採卵し手造りの孵化器で少しばかりのヤマメから孵化させ放流をつづけた。今年で十七年毎年放流の数も増え今では釣り人が訪れるまでになった。先日学会の九州支部長山崎先生も訪ねて来られ一日溪遊びを楽しんで帰られた。先生のビクにも二十匹程のヤマメが納まって居た。四時間足らずの溪行でん二十匹の釣果であれば立派のヤマメの溪に成ったであろう。この溪を守りつづける為には源流の森づくりにもっと力を入れねばならない。老齢になり引退も考えて居たが今回の受賞で止めるに止められなくなった。

老体を軋ませ乍ら当分はつづけて行く事でしょう。鮭・ヤマメの孵化育成施設も私同様老朽化が進み傷みがはげしいがマネーも底尽き破れバケツを手で塞ぐようにして維持しています。本文を読まれ良い知恵を授けて頂ければ幸いです。感想から外れ最後はグチになりましたが許して下さい。

5. 水環境若手研究・実務者育成基金による学術研究補助事業による助成報告

第44回日本水環境学会年会

(2010年3月15日-17日、福岡大学)

福岡市保健環境研究所 東郷 孝俊

この度は、平成21年度日本水環境学会九州支部学術研究補助事業による助成を賜り、誠にありがとうございました。本助成金は、今年3月15日から17日まで、福岡大学で開催されました第44回日本水環境学会年会への参加・発表に係わる参加費・旅費等に使用させて頂きました。

本学会では「博多湾および福岡市内を流れる河川水におけるPFCsの環境実態調査」という題名で研究発表を行いました。PFCsは有害性・残留性・生物蓄積性が高く、近年世界規模での環境汚染が問題となっております。そのた

め 2009 年 5 月には、PFOS など PFCs 代表物質が POPs に追加されるなどの動きもあり、日本国内での汚染実態解明が求められています。これをうけまして、福岡市でも博多湾及び市内河川（環境基準点 22 地点）の環境実態調査を実施した次第です。また、発表後は、多くのご質問をお受けしまして、今回の調査及び発表が非常に有意義なものとなったと思っております。

本補助は、若手研究者及び実務者の育成及び研究発展に資するためのもので、非常に意義のある事業であると存じます。次世代の担い手である方達のさらなる発展に寄与されますことを心より願っております。



会員の皆様へのお願い

1 支部表彰者の推薦

九州支部では年末に支部学会賞、水環境貢献賞、学術奨励賞、および功労賞の推薦を会員にお願いしています。

しかし、例年積極的な推薦がありません。皆様の積極的な推薦をお願いいたします。

特に、市民を対象とした水環境貢献賞は、内容が相応しければ、支部だけではなく本部の水環境貢献賞の受賞も可能です。皆様のお近くに環境保全活動などで水環境貢献賞に相応しい活動をしている個人や団体が必ずいるはずで、その方達の活動を応援するためにも、日頃から気をつけて年末にはご推薦をお願いします。

2 学術研究補助事業による助成への応募

九州支部では、若手研究者を対象に学術研究補助事業を行っています。

本事業では、

- (1) 国内外研究発表、
- (2) 個人研究、
- (3) 出版、
- (4) 講演会開催、

を考えている 45 歳以下の若手会員（会員期間 3 年程度以上）を対象に、5~20 万円/件の補助をするものです。しかし、十分に周知されていないようです。

今年度の第 45 回日本水環境学会は北海道で開催されます。自己負担での発表を考えている支部若手会員は、是非ご活用下さい。詳細は、本ニュースレターをご覧ください。

上記についてのお問合せは、お近くの九州支部役員、または北九州市立大学の門上（メールアドレス：kadokami@env.kitakyu-u.ac.jp）まで

※収支報告は報告書をスキャナで取り込んだものを加工せずに貼り付けています。

平成21年度 水環境学会九州支部決算資料
(平成21年4月1日から平成22年3月31日まで)

(1) 収入の部

(単位: 円)

科目	平成21年度 予算額(a)	決算額(b)	差異(b-a)	備考
講演会参加費収入	50,000	40,000	-10,000	支部総会
シリーズ講習会参加費収入	300,000	0	-300,000	シリーズ講習会
懇親会参加費収入	0	57,000	57,000	
本部より活動費収入	250,000	250,000	0	
利息収入	0	1,239	1,239	
その他	0	245,000	245,000	寄付(財新日本環境コンサルタントより)
当期収入合計(A)	600,000	593,239	-6,761	
前期繰越収支差額	3,527,098	3,527,098	0	
収入合計(B)	4,127,098	4,120,337	-6,761	

(2) 支出の部

科目	平成21年度 予算額(a)	決算額(b)	差異(b-a)	備考
支部総会開催経費	500,000	79,186	-420,814	
シリーズ講習会開催経費	300,000	0	-300,000	
研究会等補助金	1,500,000	120,000	-1,380,000	講演会・研究発表等補助 役員会等
会議費	200,000	145,190	-54,810	
交通費	500,000	1,260	-498,740	
通信運搬費	300,000	73,183	-226,817	ニューズレター等
消耗品費	50,000	1,137	-48,863	
印刷製本費	200,000	157,500	-42,500	支部研究発表会要旨集等
振込手数料	20,000	577	-19,423	
雑費	50,000	420	-49,580	残高証明書
予備費	507,098	0	-507,098	
当期支出合計(C)	4,127,098	578,453	-3,548,645	
当期収支差額(A)-(C)	-3,527,098	14,786	3,667,214	
次期繰越収支差額 (B)-(C)	0	3,541,884		

繰越金明細	金額
定期預金	0
普通預金	3,541,884
郵便貯金	0
現金	0
繰越金合計	3,541,884

収支関係書類を監査した結果、いずれも適正に処理されておりましたので報告します。

監事 加納正道 

監事 徳永隆司 

平成22年度水環境学会九州支部収支(案)

(1)収入の部

科 目	金額 (円)	備 考
講演会参加費収入	50,000	支部総会
シリーズ講習会参加費収入	300,000	シリーズ講習会
年会開催に伴う支部還元金	870,000	
本部より活動費収入	250,000	
当期収入合計	1,470,000	
前期繰越金	3,541,884	
収入合計	5,011,884	

(2)支出の部

科 目	金額 (円)	備 考
支部総会開催経費	500,000	
講演会開催経費	500,000	支部研究発表会要旨集
シリーズ講習会等開催経費	500,000	
研究会等補助金	1,500,000	講演会・研究発表等補助
会議費	500,000	役員会等
交通費	200,000	
通信運搬費	500,000	ニューズレター等
消耗品費	50,000	
印刷製本費	50,000	
振込手数料	20,000	
雑費	50,000	
予備費	641,884	
当期支出合計	5,011,884	

平成22年度 日本水環境学会九州支部 支部役員

役 職	氏 名	所 属	職 名
支部長	山崎 惟義	福岡大学工学部社会デザイン工学科	教授
副支部長	門上 希和夫	北九州市立大学国際環境工学部エネルギー循環化学科	教授
評議員	鬼倉 徳雄	九州大学大学院農学研究院動物資源科学部門	助教
	金子 好雄	東海大学工学部	准教授
	栢田 聖孝	東海大学農学部	教授
	川越 保徳	熊本大学大学院自然科学研究科	准教授
	熊谷 博史	福岡県保健環境研究所	研究員
	古賀 実	熊本県立大学	学長
	鈴木 祥広	宮崎大学工学部土木環境工学科	准教授
	高梨 啓和	鹿児島大学大学院理工学研究科化学生命・化学工学専攻	准教授
	高見 徹	大分工業高等専門学校都市システム工学科	准教授
	徳永 隆司	株式会社新日本環境コンサルタント	技術部長
	長井 一文	鹿児島県環境保健センター	水質部長
	西田 渉	長崎大学工学部	准教授
	西留 清	国立鹿児島工業高等専門学校土木工学科	教授
	原口 公子	(財)北九州市上下水道協会	主幹
	古川 憲治	熊本大学	副学長
	宮城 俊彦	沖縄県衛生環境研究所	環境科学班班長
	矢ヶ部 輝明	株式会社建設技術研究所九州支社環境・都市部	部長
	安井 英斉	北九州市立大学国際環境工学部エネルギー循環化学科	教授
	山西 博幸	佐賀大学低平地沿岸海域研究センター	准教授
監事	久場 隆広	九州大学大学院工学研究院環境都市部門	准教授
	加納 正道	九州産業大学工学部	教授
幹事	渡辺 亮一	福岡大学工学部社会デザイン工学科	准教授
	中牟田 啓子	福岡市環境局保健環境研究所	主任研究員
顧問	北森 成治		
	藤崎 一裕	九州工業大学工学部	名誉教授